令和5年度　福井県立嶺南東特別支援学校　学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
学び　1　教育課程・学習支援	○「学びの地図」を活用し、新学習指導要領のねらいに即した３つの観点に沿って指導計画を立て、実践、評価する。 【目標】指導計画作成・達成指数80%以上 ※「学びの地図」･･･特別支援学校学習指導要領解説にある自立活動および各教科の内容を本校で一覧表にしたもの	教職員の取組（成果）指標は、共に99%で目標を達成することができた。この結果から、個別の指導計画の作成において「学びの地図」を活用しながら、学習指導要領のねらいに即した３つの観点に沿って指導計画を立て、幼児児童生徒の主体的に取り組む態度について実践、評価できたと考える。また、今年度、集団で行う授業計画（月案など）のねらいに学びの地図を盛り込むことで、教師間で授業の目標を共有したことができたと考える。保護者の満足度指標は、99%で目標を達成し、通知票（個別の指導計画）が子供の実態を踏まえた適切な指導に繋がってきていると考える。	「学びの地図」の活用について今年度も昨年からの改善案を受けてより明確で活用しやすい方法を検討してきた。今年度、集団での授業計画に「学びの地図」の目標を明記したが、個別指導計画作成に目立った混乱はなかった。しかし、教職員から「学びの地図」の活用方法が分かりにくいという意見も聞かれた。次年度に向けては、さらに「学びの地図」の活用方法や様式などの検討を行い、より活用しやすいものに改善していく必要があると考える。
	○幼児児童生徒の成長や課題を適切に評価し、その情報を教師間で共有することに努め、保護者に学びに向かう姿や成長、課題をより分かりやすく伝える。 【目標】保護者の教育活動満足度指数80%以上	教職員の成果指標は、100%、保護者の満足度指標は98%で目標を達成することができた。教師間で子供の主体的に学ぶ姿、成長や課題を適切に評価し、家庭や関係機関に分かりやすく情報を共有することに重点を置いて取り組んだ。その結果、教職員はおおよそ情報を共有することができた。保護者の６割近くの方が「よく分かった」４割近くの人が「おおむね分かった」と答えており、一定の評価につながったと考える。一方で少数ではあるが、保護者からの「あまり分からなかった」との回答があったため、その意見を真摯に受け止め、保護者に丁寧に説明を行い、信頼関係を築くことが必要である。	次年度以降も、保護者の高いニーズに応えるべく連絡帳や個人懇談などで幼児児童生徒の学びに向かう姿、成長や今後の課題を適切に丁寧に伝えることに努める。そのためには、教職員間での情報の共有を密に図り、保護者や関係者へより分かりやすい情報提供や提案ができるよう努める。保護者の思いに寄り添いながら、どのように伝えていくのかを教職員に周知徹底し、信頼関係の構築にさらに努める必要があると考える。
学び　2　研究・研修	○「学びが生まれる場」について、教師間での話し合い活動を通して追究し、学部内や授業研究会で児童生徒の変容を見取りながら、次の授業・活動づくりに取り組む。 【目標】授業改善到達度指数80%	教職員においては、取り組み指標、成果指標とも達成基準における回答がいずれも100%であった。この点に関しては、「子供の学び」の観点を重視し、継続して取り組み続けたことで教職員一人一人の意識が高まり、浸透してきた結果であることがうかがえた。また、保護者の満足度指標は96%でこの点について目標を達成することができた。一方で少数ではあるが「意欲的に取り組んでいる感じは見られない」という回答もあったため、保護者にも取組の成果が感じられるように授業・活動づくりに引き続き取り組む必要性がある。	今年度の取組を振り返るとともに、他校の取組についても参考にしながら、本校の研究の方向性や取組方に活かしていくことが重要である。校内の研究会においても、所属学部の研究のみならず他学部の研究会にも参加する機会を設けていくことで、教職員一人一人の指導支援の技術のさらなる向上を計っていくことを目指す。あわせて、常に「子供の学び」の観点を意識しながら幼児児童生徒の変容についての見取りを丁寧に行い、よりよい授業・活動づくりに活かしていく。
	○「卒業後に目指す姿」を想定し、各学部における指導内容を縦割り研究会で検討しながら、系統性のある学びを目指す。 【目標】縦割り研究会満足度指数80%以上	取組指標、成果指標はともに99%、満足度指標指標では95%と、どの指標においても目標を達成することができた。各学部や寄宿舎がその枠を越えて情報交換でき、それぞれの取組を参考にしたり取り入れたりすることができた。一方で、今年度からの取組ということもあり、教職員から「系統的な取り組みができなかった」という回答があり、継続した取組を行っていく必要がある。	今年度の縦割り研究会の中で各学部や寄宿舎の教職員が情報交換する機会を設定したことは、有益であった。指導支援の系統性を持たせるためには、「卒業後に目指す姿」を常に共有しながら、指導支援を充実させることが必要である。系統性のある学びを意識し、本校独自の段階表・基準表の作成を行っていく。

令和5年度　福井県立嶺南東特別支援学校　学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
学び　３　情報管理	○主に個人情報の取り扱いやインターネット・SNSなどの危険性について、教職員や児童生徒に対する研修を進め、保護者への情報提供を図る。 【目標】情報セキュリティ遵守指数100%	研修への参加率は98%であった。２名の不参加があったが、この先生は研修終了後から本校で勤務された先生であるので、実質全教職員の参加を得られた。このような研修を通して、学校における個人の情報および写真データの取り扱いのルールを全教職員が理解することに繋がっており、情報セキュリティに対して、全教職員から、「遵守している」との回答を得られた。保護者からは、学校における個人の情報および写真データの取り扱いについて、「満足している」と「おおむね満足している」を含めて100%であり、適切に個人情報や写真データを取り扱うことができていると評価を得ることができた。 課題は、上記のような状況を維持するために、新しく赴任する教職員へ情報セキュリティに関する理解と意識向上が必要である。	引き続き全教職員に対して情報セキュリティの重要性や、個人情報および写真データなどの取扱いについてのルールを啓発することで、理解を促し情報セキュリティーを強化していく。また、新しく赴任する教職員には年度初めの研修を通して周知徹底する。 今後は保護者への伝達手段としてアプリを使用するケースが増えていくと思われるが、情報保護対策に漏れがないように徹底するとともに、情報セキュリティに対する保護者への情報提供も行っていく。
	○児童生徒の興味・関心に繋がるアプリや、障がい・特性に応じた周辺機器などの充実を図る。また、それらを含めた情報機器の活用例や使用方法などについて少人数のグループを中心に研修の機会を増やし、周知を図る。 【目標】授業・校務等への活用指数85%以上	適切に情報機器を利活用し、教育的効果や校務などの効率を高めることについて、「十分にできた」が36%、「おおむねできた」が64%で合計100%の教職員ができたと回答した。昨年度の99%より上昇したが、比率はほぼ変化していなかった。今後は「十分にできた」の割合を上げることが目標となる。保護者から、「タブレットを使用しているのか分からない」や「使用していないと思う」という意見をいただいた、どの学部でも頻繁にタブレットを使用しているがその状況が保護者にうまく伝わっていないことが考えられる。また視覚支援の知育アプリなど個に応じたアプリの充実も今後の課題である。高等部でのパソコンの活用を希望している意見もあり、就労でパソコンをできると良いという企業もあるため授業での導入を検討をしたい。	引き続き教育的効果が期待される新しいアプリや保護者会の出欠で導入されたGoogleformなどの研修会を実施するとともに、積極的に研修会への参加を呼びかけ幅広い層の教職員が理解を深める機会をつくる。タブレットを使用した学習や高等部でのパソコンの活用事例を、各学部と連携して発信していくとともに、情報管理だよりでも校外へ伝えていくことに努める。

令和5年度　福井県立嶺南東特別支援学校　学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
学び　4　寄宿舎	○寄宿舎生が主体的に生活できる環境を整え、個々の発達段階に応じて将来に繋がる生活スキルを身に付ける支援を行う。 【目標】生活スキル向上満足度指数８０％	寄宿舎指導員の取組指標、成果指標ともに100％で目標を達成した。個々の生活スキルを向上させるために寄宿舎生活を通して実態に応じた支援に取り組むことができたと思われる。今年度も児童生徒の実態に応じて3グループ（ホップグループ・ステップグループ・ジャンプグループ）に分けて活動を行ってきた。その中で寄宿舎指導員のグループリーダーが中心となりグループ間の情報交換を行い、個々の支援について寄宿舎全体で共有することができたと考えられる。保護者の満足度指標も100％で目標を達成した。生活スキルを身に付けるための支援が保護者に理解を得ていると考えられるが、学年が上がるにつれて「B　おおむね満足している」の評価が高くなっている。特に高等部では割合が高い。将来を見据えた支援について更に考えていくことが必要である。	次年度も個々の実態に応じて将来に繋がる支援に取り組んでいく。その中で年2回行っている「高等部現場実習報告会」で得た雇用に関する情報や個々の課題について整理し支援の手立てとして取り入れていく。また、これを卒業を控えた高等部生のみの支援として捉えるのではなく小高部生、中学部生の将来も見据え生活スキルの向上や社会性を養う支援を継続していきたい。
	○担任や保護者と共通理解を図り、具体的な支援や指導方法を共有する。 【目標】寄宿舎生保護者の満足度指数８０％	寄宿舎生が所属するクラスの教職員の成果指標94％、寄宿舎生保護者の満足度指標98％とともに目標を達成した。学校や家庭との日々の連絡帳や学舎連絡会また、保護者懇談を通して情報を共有し支援に繋ぐことができたと思われる。教職員の評価に関しては「C　あまりできなかった」の評価もあった。クラスの教職員との連携方法について更に工夫していく必要がある。	次年度も教職員、保護者との連携を密に行っていく。クラスの教職員と支援の共有ができるよう学舎連絡会のみではなく、日常の様子などの情報交換を行うなどして連携を強化していきたい。また、学校や寄宿舎で見えてきた児童生徒の課題を明確にして保護者に分かりやすく伝え、よりよい支援を行っていきたい。
安心・安全な生活　5　児童生徒支援	○いじめなどの問題行動の未然防止や早期解決のため子供の個別の状況に応じた適切な対応を行うとともに、学校行事を通してやりがいや楽しみ、挑戦する気持ちを育てる。 【目標】安心・いきいき指数90％以上	教職員に対する取組指標、成果指標とも100％で目標を達成することができた。クラスの担任、副担任だけで対応するのではなく、学部や生徒指導委員会を通じての共通理解を図ろうとする取組が教職員の意識に定着してきていると考えられる。保護者に対する満足度指標は97％で目標を達成することはできているものの、3％（２名）の保護者からは「子供がやりがいを感じながら登校することができる」に対して「ほとんどできていなかった」という回答をいただいた。その内の1名は「やりがいを感じているかどうかは分からないが、行き渋り無く登校できた」と書かれていることから、家庭での子供の様子から学校行事に対する「やりがい」を感じることができているかどうかの判断が難しかったのではないかと推察される。	引き続き子供の様子を詳しく見取り、子供や保護者とのコミュニケーションを密にしたり他の分掌と協力して対応したりするなどして、問題行動の未然防止や早期発見に努めていく。また、行政や医療などの関係機関との連携を推進していく。学校行事の内容については、全ての児童生徒がより活躍できるよう工夫していく。
	○幼児児童生徒の状況について保護者との情報交換を密にして共通理解を図り、学校と家庭双方で子供が安心できる場をつくる。 【目標】保護者の生徒指導信頼指数90％以上	教職員に対する取組指標、成果指標とも100％、保護者に対する満足度指標は96％で目標を達成することができた。連絡帳や懇談を通して家庭と学校の情報交換を積極的に行い、概ね共通理解を図ることができたと思われる。内進の高等部生徒と思われる保護者から「外進の生徒も多く、大勢の中で今まで感じたことのないような不安や登校渋りが目立つようになった。自宅で涙を見せることもあった。」という記述があった。環境の変化などで学校生活に対して不安な気持ちが増し、家庭での様子にも影響が現れている生徒が一部認められる。また、中学部生徒保護者からは家庭で落ち着いて過ごせていないという意見があった。	家庭、学校の両方において児童生徒が落ち着いて生活できるよう、引き続き連絡帳や懇談を通して保護者との情報共有を図ると共に、家庭と連携した児童生徒への支援を行っていく。家庭に適切なアドバイスができるよう、児童生徒理解や支援についての教職員の専門性を高めていく。

令和5年度　福井県立嶺南東特別支援学校　学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
安心・安全な生活 6　保健・安全管理	○マスクの着用を求めないことを基本とする学校生活において、場面に応じた感染症対策が適切に行われるよう幼児児童生徒の衛生指導に取り組み、感染防止に努める。 【目標】感染症対策充実度指数80%以上	教職員の取組指標は100%、成果指標は99%と目標を達成することができた。本年度５月から新型コロナウイルス感染症の取り扱いが変更になり日常生活の過ごし方にも変化があったが、教職員はそれまでと変わらず日々感染防止に努めることができたと思われる。しかし成果指標については、「おおむねできた」の回答が半数近くを占めていた。咳エチケットに関することなど徹底できていない部分もあったと思われる。保護者の満足度指標98%であり、ほとんどの保護者から理解と評価をしていただくことができた。しかし２%の方からはあまり満足していないという回答があった。保護者の方々と連携を取りながら、感染症について必要な情報を引き続き発信していくためのシステム作りが課題である。	新型コロナウイルス感染症の取り扱いに変更があったが、今後も感染がなくなることはない。咳エチケットに関することなど、引き続き必要な感染症対策に取り組み感染予防に努めていきたい。感染症に関する情報の発信についてはホームページへの掲載やメールでのお知らせを活用しながら、必要な内容を必要な時期に発信する。
	○安全点検や避難訓練、防災・防犯研修等をとおして危機管理に対する意識を高め、より安全な生活を送ることができる環境を整える。 【目標】環境整備充実度指数80%以上	今年度は今までの避難訓練に加え、新しく地震に対応したシェイクアウト訓練を取り入れた避難訓練を行った。また、防災研修や防犯研修をコロナ禍前の形で実施した。教職員の取組指標、成果指標はともに100%であり、危機管理に対する意識を高くもって指導に当たることができたと思われる。しかし、成果指標については「おおむね高めることができた」の回答が半数以上を占めた。訓練の時は安全に対する意識は高められているが、普段の生活の中では十分でないことが考えられる。学校生活全般で子供たちの安全に対する意識を高めていくことが課題となる。保護者からの満足度指数は100%であり、評価と理解をいただくことができた。	能登半島で起きた震災のように、災害はいつ起きるか分からない。災害に対する心構えを普段から幼児児童生徒にもたせられるように、今後も専門家の意見を聞きながら避難訓練を計画的に実施し、もしもの時に確実に避難できる力を養いたい。また、日々の生活の中でも安全に対する意識が高まるよう指導していきたい。研修については、より実践的な内容を取り入れながら実施し、教職員の危機管理に対する意識を高めて普段の指導に当たることができるようにしたい。

令和5年度　福井県立嶺南東特別支援学校　学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
家庭や地域社会とのつながり７　進路支援	○各事業所から聞き取ってまとめた「今から取り組んでほしいことや必要な力」を意識しながら、幼児児童生徒の卒業後を見据えた支援を行う。 【目標】卒業後を見据えた支援満足度指数80%以上	取組指数98%、成果指数99%、保護者の満足度指数94%で目標を達成することができた。この結果から「今から取り組んでほしいことや必要な力」を参考に現在や今後の課題を適切に設定したり支援したりすることができたのだと思われる。しかし、項目Bの卒業後に必要な力を付けることができたかでは、「おおむね付けることができた」が77%と大部分を占めており、確かな手ごたえがあったのかは不明だと思われる。課題として、少数ではあるが、小学部の保護者から「まだ卒業後のことまで考えられない」「明確な物が見出せず漠然としている」「卒業後のことを考えると不安しかない」「まだ小高なのでこれからかなと思う」。中学部の保護者からは「教師と卒業後を見据えた話し合いはしていない」といった意見をいただいた。小学部段階と中学部段階とでは、保護者の意識にも少し差があるので今後検討していく必要がある。	教職員は小学部低学年の段階から児童に卒業後を見据えた適切な課題を設定し、支援をしていく必要がある。中学部になると保護者も少しずつではあるが、卒業後に向けて意識する頃ではないかと考える。教職員はタイミングを見て積極的に生徒・保護者に対してよりニーズに即した情報提供と支援をしていく必要がある。卒業後を見据えた支援の一つとして中学部生の「高等部への作業体験学習」がある。作業中の課題を把握し、今後の生活に生かしていくことができる貴重な体験である。今年度は高等部教員数が十分に確保できない現場実習中の体験学習ということと、中高等部生の人数増加により、中学部の要望に沿った十分な作業体験の時間と作業内容の確保ができなかったように感じる。今後は体験学習の時期を見直し、有意義な体験になるよう改善していく必要がある。また、教職員の卒業後に向けた支援の意識改革として、引き続き現場実習中の小中学部教員と寄宿舎指導員の福祉事業所への見学の機会を保障していく。
	○将来の生活への関心・意欲が高まるように進路に関する情報提供の充実を図る。 【目標】情報提供満足度指数８０%以上	取組指数94%、成果指数84%、保護者の満足度指数99%で目標を達成することができた。生徒への情報提供として、「職場見学（高等部1年生対象）」や「卒業生と語る会」の開催、教師や保護者への情報提供として「進路の手引き」や「進路便り」の発行、「施設訪問研修（小・中学部対象）」などを行った。これらの取組により、幼児児童生徒に将来や進路に対する関心を高めさせることができたと思われる。また、保護者にもおおむね情報を伝えることができたように思う。課題として、「施設訪問研修」の参加者は中学部の保護者・教員のみであった。上記にもあったように、小学部段階で卒業後のことを考えるのはまだ早いといった卒業後の意識に差があるのかもしれない。また、中学部の保護者からは、「将来や進路についてはまだ話し合いをしていない」といった意見をいただいたので改善が望まれる。	全体への情報共有として、引き続き「進路の手引き」の更新や幼児児童生徒にも分かりやすい内容の「進路だより」の発行を行っていきたい。その際、授業や保護者懇談会でも活用できるような分かりやすい構成を心がけたい。また、「職場見学」「施設訪問研修」「卒業生と語る会」など直接企業や福祉事業所で働いている方の話を聞くことができる機会は貴重であるので今後も継続していきたい。さらに、企業や福祉事業所との連絡を密にし、正しい情報を教職員や保護者へ発信していきたい。どうしても、中学部・高等部中心の行事になってしまっているが、小学部にも積極的に情報を発信したり参加を呼びかけたりしていきたい。
家庭や地域社会とのつながり　８　ＰＴＡ・交流	○社会の状況を考慮しつつ、幼児児童生徒の特性や保護者のニーズに合った、参加しやすいPTA行事の充実を図る。 【目標】保護者のＰＴＡ活動満足度指数80%以上	教職員の取組指標が昨年の100%から98%となり、PTA活動に対しての理解は得られているものの、学部や寄宿舎以外の教職員にしっかりと周知できていなかったのではないかと考えられる。また、成果指標も昨年の94%から89%となった。目標指数には達してはいるが、「あまりできなかった」「できなかった」と回答した教職員が昨年度より増加したことについては、その背景について検討することが必要である。 保護者の満足度指数は、93%から98%となった。ようやく感染症に関する様々な制約が緩まり、どの行事も人数の制限を無くすことができた。家族で参加できる行事を企画し、保護者と学校が協力しながらＰＴＡ活動の計画・運営を行うことができた成果と考えられる。	引き続き全教職員に対し、ＰＴＡの行事や広報誌などの情報を確実に伝え、それぞれが関心をもって参加・協力できるように努める。 社会の状況を考慮しつつ、児童生徒や保護者が安心して参加し楽しめたり、今後の児童生徒について考えたりできるような行事を企画していきたい。保護者のみが対象だった座談会を、今年度は親子での参加も可能として土曜日に開催したように、保護者のニーズに合わせた行事を計画していきたい。 また、今後も役員会や委員会を保護者懇談会と同日に行うことができるよう配慮するなど、保護者がＰＴＡ活動に負担感なく参加できるよう努める。
	○居住地校交流や学校間交流において間接交流を含めた実施方法の工夫をし、有意義な交流活動を行う。 【目標】幼児児童生徒の交流及び共同学習満足度指数80%以上	教職員の取組指標と成果指標は、それぞれ99%と96%から100%となった。教職員が交流の意味をよく理解して活動の計画・実践をし、それによって児童生徒の興味・関心を広げることができたと考えられる。 昨年度96%だった保護者の満足度指標は97%となった。どの交流も間接交流から直接交流に移行してきており、実際に相手校の児童生徒と交流することでリモートでは感じにくかった交流の良さを感じる児童生徒が増えてきたためと考えられる。	交流及び共同学習について理解を保護者の方々に深めていただくために、入学説明会などにおいてその意義を丁寧に伝えていくようにする。また、交流後は連絡帳や学級通信などで交流の様子を保護者に十分伝えるように努める。 今年度、保護者の満足度指標の結果の数値は上がったものの、中学部と高等部でＣ、Ｄと回答した保護者が増えた。学校間交流がない中学部・高等部の交流活動はライオンズクラブとの交流のみになる生徒がほとんどであるため、その際には機会を逃さず交流の様子が保護者に伝えるようにしていきたい。

令和5年度　福井県立嶺南東特別支援学校　学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
家庭や地域社会とのつながり９　教育相談	○幼児児童生徒の実態を多方面から把握し、支援目標や内容を適切に設定して個に応じた支援を連携して行う。 【目標】個別の教育支援計画目標達成指数90%以上	教職員の取組指標及び成果指標は、Ａ，Ｂ合わせて100%であり、目標を上まわる結果が得られた。教育支援計画の意義や活用の仕方を踏まえながら、学部内またはクラス内で話し合いをもち、その内容を念頭におきながら児童生徒の指導支援に関わることができたのではないかと考える。保護者の満足度指数も100%であり、日々の連絡帳や保護者会での懇談を通じて、保護者や本人の願いを踏まえた支援方法を共通理解することができ、子供の成長を感じることができた結果の表れだと考える。成果指標のＡ判断の割合が50%以下であるため、実態把握や教育支援計画の作成・活用のより良い方法をについて検討していく必要がある。	実態把握や教育支援計画の作成の意義を年度始めに全教職員に伝える機会をもち、さらに学部会で活用方法について具体的に伝えるようにする。また、支援が途切れないように定期的に声かけを行い啓発する。今年度は、Ｃ、Ｄの回答の方のみの自由記述欄であったため、保護者からの回答が全くなかった。Ａ、Ｂであっても保護者からの具体的な意見や感想をいただけるように、アンケート内に自由記述欄を設けたい。
	○地域における特別支援教育のセンター的機能の充実を図るため、ニーズを聞き取り、困り感に寄り添った支援を行う。 【目標】巡回相談満足度指数90%以上	巡回相談先の満足度指標は、２項目共にＡ、Ｂ合わせて100%であった。今回は全ての相談先からアンケートの返答を得ることができた。アンケートの回答方法をＱＲコード方式にしたことが、返答率の高さにつながったようだ。意見や感想の記述からは「丁寧に（親身に）対応いただきありがとうございます」や「具体的な支援や進路の方向性を考えてくださりありがとうございます」、「保護者面談に十分に時間を取っていただきありがとうございます」などおおむね高評価をいただくことができた。相手校のニーズに合わせ柔軟に支援策を提案したり、保護者対応を行ってきたりしたことの結果であると考える。	巡回相談については、今後も丁寧な行動観察及び情報提供、面談を行い、支援方法や進路について必要な情報を提供できるように真摯に努めていく。特に、年々対応が難しい相談ケースが増えているため、必要に応じて他機関との連携に繋げられるように事前に準備しておく必要がある。保護者面談については、子供のより良い支援のために学校と保護者が連携できるよう、必要に応じて実施していく。アンケートの回答は来年度以降もＱＲコード方式で行い、ニーズの把握に努めていく。